

講義を行った患者の話から (抜粋)

39歳の時、健康診断を受けた病院で、私はB型肝炎を発症していることが分かりました。胸の奥から締めつけられるような息苦しさがあり、当時小学生だった子どもたちが学校に行った後は、ただ泣きながら、一日の大半を横になって過ごす日々でした。立っているのもつらく、床を這って移動することもありました。

また、凄まじい偏見・差別を受けました。古くからの友人に「B型肝炎になってしまった」と電話で話したら、急に友人は黙り込んで、それ以来、連絡は途絶えてしまいました。「あなたの息子さんが大けがをして救急車で運ばれたら、救急隊員の人にうつるでしょ」と知人に言われたこともありました。

インターフェロンの注射を打ちに行った時のことです。医師に声を出しながらカルテを読み上げられ、最後に「一番うつりやすいな。それで看護師さんが注射を打つのを怖がって逃げて行ったのだな」と、笑いながら言われました。一瞬、私は頭の中が真っ白になりました。医師にひとことも言い返せず、診察室から出ることもできず…腕を差し出してその医師から、インターフェロンの注射を打ってもらいました。診察室を出たら、涙がどっと溢れてきました。医師からもそのような態度を取られるとは思いませんでした。

私は自分の体の中に流れる血を、B型肝炎という病名を、心の底から憎みました。いつまでも続く体の苦しさ、病気の進行への不安、生きていくのはもう嫌だと思いました。子どもたちが寝た後、ベランダの手すりから身を乗り出しました。けれど、私には子どもたちがいる…どんなに苦しくても生きていかねばと、思いとどまりました。



どうして泣いてるの？

活動を通してB型肝炎患者たちの悲惨な実情を知り、それを世間に伝えたいと思って実名を出して活動することになりました。私たちのような悲劇は二度と繰り返さないでほしい。そして、「私はB型肝炎患者です」と胸を張って言える社会の実現を願っています。

全国B型肝炎訴訟原告団とは…

1948年以降、全ての国民・住民が法律によって幼少期に集団予防接種を強制させられ、その際の注射器の連続使用によって、40数万人(国の推計)もの国民・住民がB型肝炎ウイルスに感染しました。

国は、2011年によくその責任を認めて謝罪をしましたが、現代医学では治療法が確立されておらず、患者を取り巻く差別や偏見が無くなった訳でもありません。また、社会への啓発が不十分なため、ウイルス検査の受診が徹底されておらず、自覚症状がないまま感染している患者が数百万人いるとも言われています。

こうした現状を変えるために、全国の被害者と支援弁護士が協力して活動を行っているのが、全国B型肝炎訴訟原告団です。

患者講義に関するお問合せは

〒556-0013 大阪市浪速区戎本町1-9-21

酒井家ビル3号館302号室

全国B型肝炎訴訟大阪弁護団 事務所

TEL: 06-6647-0300 (平日10時～17時)

FAX: 06-6647-0302

<http://bkan.jp/>

<http://bkan-osaka.jp/>



B型肝炎

患者の声を通して考える「いのちの教育」

——人に寄り添う看護・行動とは？

患者講義実施のご提案

ボケらの健康を守るための予防注射だからガマンするよ！



肝炎患者の「命の叫び」は、人が生きることそのものなのです。

全国B型肝炎訴訟原告団

私たちは「いのち」に向き合う教育を行っています

現在、肝炎ウイルスへの感染者の数は、日本全国で 350 万人とも言われていますが、その多くは、自身がウイルスに感染しているということも知らないままに生活をしているのが現状です。

それは、国の施策によって実施された集団予防接種等の際の注射器の使い回しなどによって拡大したウイルス感染の被害に対して、一般の国民への教育・啓発が不十分であることを意味しており、それによって、病気の苦しみだけでなく、患者に対する差別や偏見などの二次的な被害も起こっているのです。

私たちが社会の中で生きていくためには、多くの人との関わりの中で、他者に共感する心を身につける必要があります。特に、病気の苦しさの中で人生の苦難に直面している患者に接する機会が多い看護士や弁護士などを目指す学生には、患者の声を直接聞き、自ら何が正しいのかを考えて患者に寄り添うことができる大人になってもらいたいと願っています。

全国 B 型肝炎訴訟原告団は、患者の皆様が安心して治療に専念することができる社会を目指して、大学や専門学校などで患者講義を行っています。私たちの願いが、少しでも多くの方の心に届きますように…。

病気で苦しむ人が
ひとりで苦しむことのない
社会を目指して



大学や専門学校での講義やレクチャーの様子



看護学部の大講堂でも講義の様子



看護学校の授業で指導を行う支援看護師

苦しみをお家族にも伝えることができないのはとても辛いことだと思います。

「自分は B 型肝炎です」と言えるような社会になるために手助けをしたいと思いました。

350 万人もの感染者がいると聞いて、人事じゃないと思いました。

この講義を受講した学生の感想から (抜粋)



あなたは肝炎ウイルス検査を受けたことがありますか

- ☐ はい
☐ いいえ
☐ わからない



日本国内での肝炎ウイルスの感染者数は 350 万人とも言われていますが、「☐はい」と答えられる人は驚くほど少数です。

差別や偏見について

- ・感染が判明した当時、勤めていた会社で「あいつに近づくとうつる」「付き合わないほうがいい」等の陰口を言われて職場で孤立し、居づらくなり退職した。その後は、誰にも B 型肝炎のことは話さなかった。
- ・恋人がいたが相手の親に結婚を反対され、やむなく身を引いた。
- ・B 型肝炎を理由に離婚された。



患者講義は、このような内容になっています

① 日本における肝炎患者の数とウイルス性肝炎という病気について

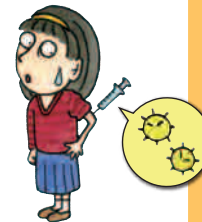
ウイルス性肝炎には主に B 型と C 型がありますが、日本には約 350 万人もの患者がいると言われています。しかし、ウイルス性肝炎になる原因については、多くの人が正しい認識を持っていないのが現状です。



② B 型肝炎の歴史について

1988 年までは、肝炎が蔓延する危険性があることが知られていながらも、注射器の使い回しが行われていました。その結果、多くの人がウイルス性肝炎に感染し、母子感染によって更に被害が拡大してしました。

2011 年に国が責任を認めて謝罪をしましたが、患者が元の健康な状態に戻った訳ではありません。では、患者の苦しみとは、病気の苦しみだけなのでしょうか？



③ 患者の声を直接聞いてみます

患者がこれまでに体験した病気の苦しみや心の葛藤、願いなどのお話を直接お聞かせ頂きます。

④ 肝炎患者が置かれている状況について

肝炎患者は、病気や治療による「身体的なこと」以外にも、「経済的なこと」「心のいたみ」などの苦しみを抱えています。母子感染によって自分の子供に感染させてしまった苦しみや、病気についての正しい知識が社会に伝わっていないために、差別や偏見の目で見られたりする苦しみを受けているのです。



⑤ 私たちにできることは何でしょう？

肝炎患者が、安心して暮らすことができる社会にするためには、どうすれば良いかを考えます。場合によっては、グループディスカッションなどを実施してもらう場合もあります。

肝炎コーディネーターの必要性について

肝炎コーディネーターとは、肝炎患者やキャリアに対する適切なアドバイスを行ったり、肝炎ウイルス検査の受診案内や家族の方からの相談などを受けることができる専門知識を持った人のことですが、全国的にまだ数が足りていないのが現状です。

